

還暦を過ぎたこの歳に相応しい「<sup>1</sup>好奇心（未体験・未知の事物に対する強い関心欲）」が疼き、「<sup>2</sup>探究心（物事の真相・本質を探りたいとする向上心）」が自噴し、するとその思いを実行・実現したいという「<sup>3</sup>冒険心」――すなわち「知行合一」の行動欲が躍動する、いわば好奇心と探究心の統合に駆られる心の蠢きに従順になりたいと強く念ずるようになった。もう歳だから、などと弱音を吐く萎縮的な防衛本能は脇に追いやられるような境地になった。

このような中においてバランスのとれた心技体の持ち主こそが充実した人生ということだろうが、今の私はバラバラに進行中である、そこであえて私という人間を動植物に重ねて見た。私の人間としての基本要素「心・言・行」について、その思い「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」を、図(表)-1のとおり、順に「<sup>さかき</sup>榊・<sup>しきみ</sup>柁・<sup>つばき</sup>椿」様相、「<sup>あおき</sup>青木・<sup>たけ</sup>竹・<sup>さくら</sup>桜」様相、「<sup>あり</sup>蟻・<sup>かめ</sup>亀・<sup>ちょう</sup>蝶」様相に託して、それらを重ねた・抱えたトンガリ変態として、この名に恥じないように自由を満喫、楽しく生きたいものである。

|                      |                      |                    |
|----------------------|----------------------|--------------------|
| 心                    | 言                    | 行                  |
| さかき しきみ つばき<br>榊・櫛・椿 | あおき たけ ざくら<br>青木・竹・桜 | あり かめ ちょう<br>蟻・亀・蝶 |
| 図(表)－1               |                      |                    |

1. 私の『心』象徴は「<sup>さかき</sup>榊・<sup>しきみ</sup>柹・<sup>つばき</sup>椿」

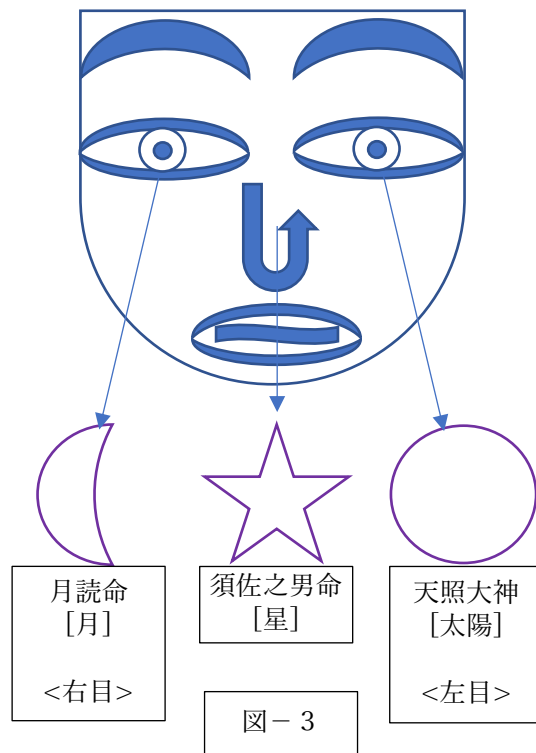
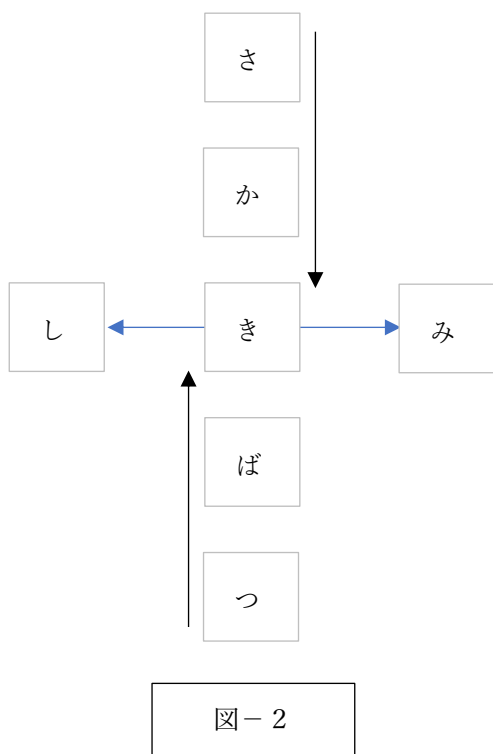
○1；図－2 参照のこと、「さかき、しきみ、うばき」に共通文字の『き』で読みが始まる漢字は838件あるそうだが、その中で私が込めた意味合いは次のとおり。陰陽の相互反対雰囲気を同時内包である。

- ・「心」を「きれいに」「きらびあかに」、<sup>きっすい</sup>「生粋」のきという陽の意味合いを込めている。
- ・また、「奇妙、奇天烈、<sup>き</sup>忌』のきという陰の意味合いを込めている。

○2；共通文字「き」は、日本神話（古事記・日本書紀）における図-3のとおり<sup>3</sup>の三貴子をも重ねている。伊邪那岐神（男、夫・父）は、伊邪那美神（女、妻・母）を追いかけて・・・黄泉の国から帰られたイザナキは、川に入って禊を行うが、真水と海水の合流点（河口）付近で中瀬——上瀬は急流であり、下瀬は緩流であり、その2箇所は適地に非ずして、上瀬と下瀬の中間地（中瀬）で臨み、最後に顔を洗った際に三貴子を産む。この話の肝は『中』である、中和の中、中庸の中である。

○3；「さかき、しきみ、つばき」に重み（比重）の差異・優劣・軽重はない。この三つについて今の私は、次の様に神・仏・キに照応させている。心磨きの拠り所の一つは「神様、仏様、キリスト様」の教えである。神様の天地・大自然の大法則、極無限の自由の道——「<sup>かなながら</sup>随 神の道（人の私心を加えない、人為的技巧のない神意本来の道）」と、仏様の「無量寿・無碍光<sup>むげこう</sup>の道（量り知れないほどの尊い命を存分に活かす道）」、キリスト様の博愛主義——「人を裁くなかれ（新約聖書 マタイ7章1～5節）——である。

- ・ <sup>さかきどころ</sup> 榊 心 は、神事で重宝・重用されていることから“神 心”の欠片を願望する。
- ・ <sup>しきみどころ</sup> 榊 心 は、仏事で重宝・重用されていることから“仏 心”の欠片を願望する。
- ・ <sup>つばきどころ</sup> 榊 心 は、キリスト教で重宝・重用されていることから“キ 心”の欠片を願望する。



大和民族の最下位基層には古来の神祇信仰があって、仏教が伝来し、後にキリスト教が到来した歴史を踏まえて、文明が進歩して来た。私が生まれる前から社会があって地域コミュニティ（共助）はあった、そこで両親から私が生まれてアイデンティティが育まれ自己確立（自助）を図り、社会セフティーネット（公助）の張られた国家で生きられている。このような考え方を私見で関連付けたのが図(表)－4のとおりである。図－5aは榊、図－5bは榊、図－5cは榊である。

|   |    |                                                                                                                                                                                                     |    |       |
|---|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|-------|
| 榊 | 神心 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本では古くから神事に用いられる植物である。</li> <li>・ 我が国古来の <sup>かながらのみち</sup> 惟神道 は、地縁・血縁などで結ばれた共同体（部族や村など）を守ることを目的に信仰されて来た。</li> <li>・ 真のコミュニティには、対等互啓の共助が必要である。</li> </ul> | 共助 | 神祇信仰  |
| 榊 | 仏心 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本では古くから仏事に用いられる植物である。</li> <li>・ 仏陀の教えは、生老病死を抱える人の自己救済を求める目的で信仰されて来た。</li> <li>・ 人間社会繁栄の起点は、個人・各人の自助・修養努力にある。</li> </ul>                                  | 自助 | 仏教    |
| 榊 | キ心 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ キリスト教（カトリック信仰）では榊（カメリア）を聖樹・霊樹と見做している。</li> <li>・ 人種や主義主張を超えた博愛主義や無償の奉仕という思想が貫かれている。</li> <li>・ 真の公助の役割は、公正な競争や機会均等社会の構築に向けた社会ルールの策定にある。</li> </ul>         | 公助 | キリスト教 |

図(表)－4



図-5a



図-5b



図-5c

## 2. 私の『言』象徴は「青木・竹・桜」

### (1) 青木 (アオキ)

○1；図-6（吾が庭のもの）とおり、葉は上から見ると綺麗な対称性の十字を構成している、十字対生である。葉が十字対生の植物は沢山あるがアオキが私の意図する対象物である。人間もほぼ左右対称、しかし、葉も人間も上下対象ではない。このアオキの雌雄の花弁も十字対生、かつ左右上下対象である、つまり、点対称なのである。「似ているが違う、違うようで似ている」ここがいいのである。全姿が年間常緑である。普通の植物が葉を落とし、実を落とす真冬（3月～4月）に真っ赤な実を付けるのだ。また、日向よりむしろ日陰の方が瑞々しく育ち、日向においては葉が茶褐色に朽ちるものが出て来る。中には同じ木で赤い実（種）を付けたまま花を咲かせている。これらの性質はいわば**変わり者（偏屈？）の象徴で私に似つかわしいもの**である。

○2；アオキの花言葉には、「若く美しく」「初志貫徹」「変わらぬ愛」「永遠の愛」の4つの意味があるそうだが、私が一気通貫歩き旅スルーハイクで背負った意義は「初志貫徹」「所期の目標貫通」の精神が欲しかったからである。

○3；人々や車や動物が行き交うその交差点は十字路やY分字路（三叉路、T字路）だが、象徴化（デフォルメ）すれば十字路である。人間模様を重ねれば、交差点は人々が出会い、離れ別れる、  
会者定離・愛別離苦の悲喜交々の結合点である。人間は喜怒哀楽が止めどもなく湧いて来るが、その瞬時瞬間に判断の分岐に出会い、その分岐で判断を迫られ選択の判断を行う。その時に応じて適宜適切に正しい判断を鍛錬・醸成したくアオキを念じている。



図－6

## (2) 孟宗竹（孟宗ダケ）

（孟宗）竹に魅力を感じるのは何といっても図－7（自宅近くの県営公園「悠創の丘」で撮影）のとおりのしなやかさ、したたかさである、風雪の赴くままに柔軟に対応する。同図は着雪があって、その重みで先端が地表に着いた状態で、折れる様子はない、曲がった繊維質の躯体には下向きの力に反抗する上向きの力が蓄蔵される、雪が融けるとバネの反発力でピーンと直立する。「首を垂れる稲穂かな」という教訓があるように「首を垂れる<sup>たけぢから</sup>竹力」である。稲穂とは違う、まさしくバネに通じる「再起・再生・再活」のイメージと重なる。同図右のような姿は、夏分は同図左のようにピーンと立ち上がる、毎年見ているがその生氣には感嘆する。

（孟宗）竹の特徴は一般的には、木質で中空、均一な太さ、弾力に富み・強靱などであり、かつ、中空を遮断する節を作り、**しなりと共に節は強さを増し、成長に連れて<sup>かんさや</sup>稈鞘（皮）が脱落する。**竹類はイネの仲間であり、発芽してから長い年月は地下茎で繁殖する。ある一定の時期に達すると、――60年～120年に1度だけ花を咲かせ、種子を实らせて一生を終えるとされ、この辺も変わり者であ



図－7

る。

それにしも、竹は天に向かってすくすくと伸びて行き、他方で、雪に押されて反対の地に向かって垂れるが痛々しくは見せない、変幻自在の様相である。人間としてもこのようにありたいものだ！

### (3) 桜 (サクラ)

○1；桜は色々あるが、図-8――自宅近くの曹洞宗耕源寺境内――のとりのソメイヨシノ（花弁は白色・淡いピンクで5弁）は日本人が大好きで一番親しみを感じる花である。桜は葉という飾り付けをする前にいきなり本題の花に行く、くどい前置きをしない、虚飾しない、いわば、**素性を曝け出す**のである。<sup>さくらぎ</sup>桜樹の躯体は大きく構えて、<sup>ずうたい</sup>図体を大きく、一つの花は小さく皆が集まって華やかに見せる。しかし、「オレが俺我」とでいつまでも未練がましく出しゃばるものがない。**開花の期間は短く、時が来ればさっと風波に乗り舞い散って行く**、（椿に似ている。） 潔く一斉に散る花吹雪模様は、何も語らずに見事に散るが、私のか細さ・可愛さ・ひ弱さの中に超然とした美しさ――「山椒は小粒でピリリと辛い」にも共通性を感じる。散る様から「別れ」が、どこかに落ちる様から「新しい出会い」を想起する。日本の代表花は昔の昔は「梅」であったが、奈良・平安初期から平安中期に至る途中で「桜」に交代劇があったということである。

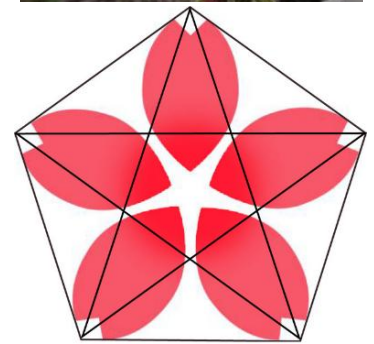


図-8

○2；桜に係る二人の和歌である。

□<sup>もとおりのりなが</sup>1本居宣長の和歌

『 敷島の 大和心を <sup>ひとと</sup>人間はば 朝日ににほふ 山桜花 』――大和心（日本精神）とは何かと人が尋ねるなら、朝日に照って輝く山桜の花、であると答えよう。

日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の花の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心である。

□<sup>2</sup>西行法師の和歌

『願わくば 花の下にて 春死なむ その如月の 望月の頃』――願うことならば（旧暦で）2月15日の満月の頃に満開の桜の下で死にたいものだ。

花とは桜の花のこと。桜の歌人と呼ばれるほど桜が好きだった西行が死ぬ時と場所を願った歌であるが、この歌のと通りの翌日2月16日に亡くなったとのこと。ちなみに2月15日は釈迦の入滅の日、誕生日は4月8日である。

3. 私の『行』象徴は「<sup>あり</sup>蟻・<sup>かめ</sup>亀・<sup>ちょう</sup>蝶」之助

心・言・行の『行』側面を動物に仮託する、私には純粹・自由な行動意欲を阻害しようと内奥<sup>ないおう</sup>で画策する<sup>(註)</sup><sup>さんし</sup>三尸の虫が住んでいる、その虫を退治してくれるのが「蟻・亀・蝶」である。この三つを以って「小粒の三体」と称している。一気通貫スルーハイク遊学紀行にあっては、図(表)－9のと通りの意味合いを込めて、「蟻・亀・蝶」之助の気分になり、「天地人」の三位一体感を秘めて歩いて来た。

|                  |   | 好奇心                                                                            |          |               |                  |  |
|------------------|---|--------------------------------------------------------------------------------|----------|---------------|------------------|--|
| 3<br>冒<br>険<br>心 | 蟻 | 目立たぬ蟻の底力を示す「千丈の堤も蟻の一穴より」という諺がある。<br>一步一步に意味を込めて進めば、必ずや難関においてはブレークスルーとなる。       | 地<br>(□) | 人(私)<br>[□◇○] | 2<br>探<br>究<br>心 |  |
|                  | 亀 | のろまの亀は、油断の兎に勝つことがある。<br>諦めずひた向きにただひたすら前進、その先には必ずや勝機が開ける。                       |          |               |                  |  |
|                  | 蝶 | 蜜を吸収したく、相手を選ばすどこまでも飛んで行く。<br>鳥瞰視野を持ち、稀有な人がいれば、私淑を請うべくどこにでも馳 <sup>は</sup> せ参じる。 | 天<br>(○) |               |                  |  |
| 図(表) - 9         |   |                                                                                |          |               |                  |  |

(註)

- ・ <sup>じょうし</sup>上尸～私の脳内に居座り、思考障害に至らしめんとする悪い虫
- ・ <sup>ちゅうし</sup>中尸～私の腹内に居座り、臓器の病気に至らしめんとする悪い虫
- ・ <sup>げし</sup>下尸～私の足内に居座り、脚力を弱体化せしめんとする悪い虫

図－10aは、六十六部行者「快順」（現天童市出）の巡礼行路図、同図bは吉田松陰の遊歴コースである。現代のような交通手段が発達していなかった時代で、全て自らの足で歩いた路である。感動しきり無性に憧れる。

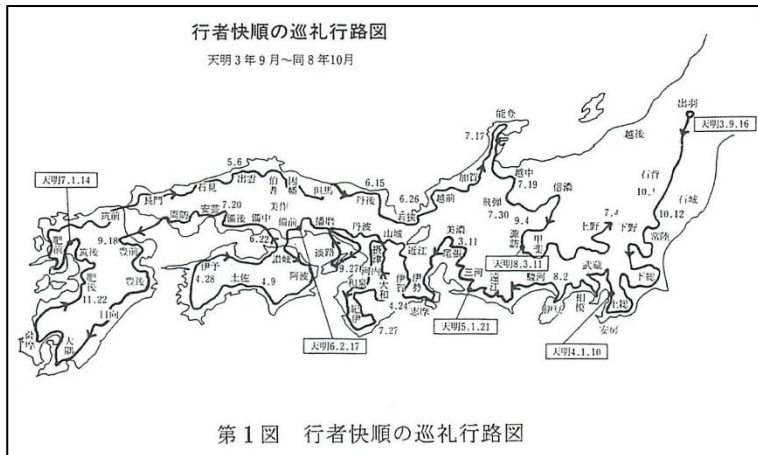


図-10a ; 「村山民族11号」より

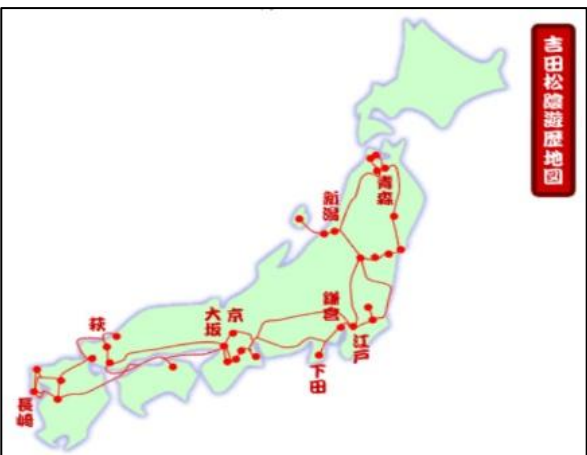


図-10b ; ネットより

対して図-11は私の10年間の六十六部擬き全徒歩スルーハイク遊学紀行のラインである。

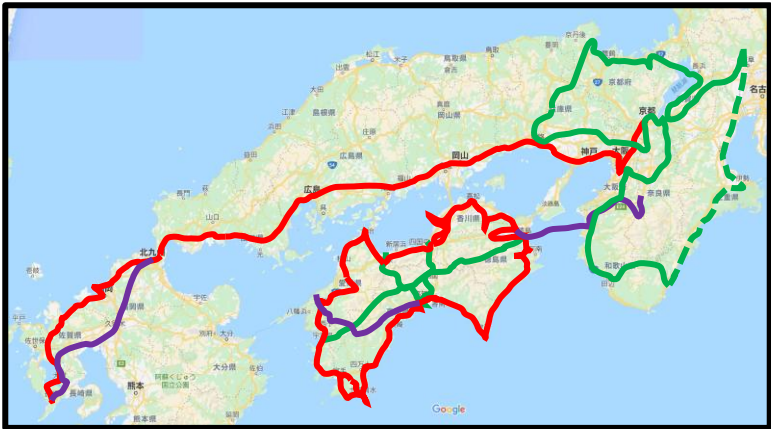
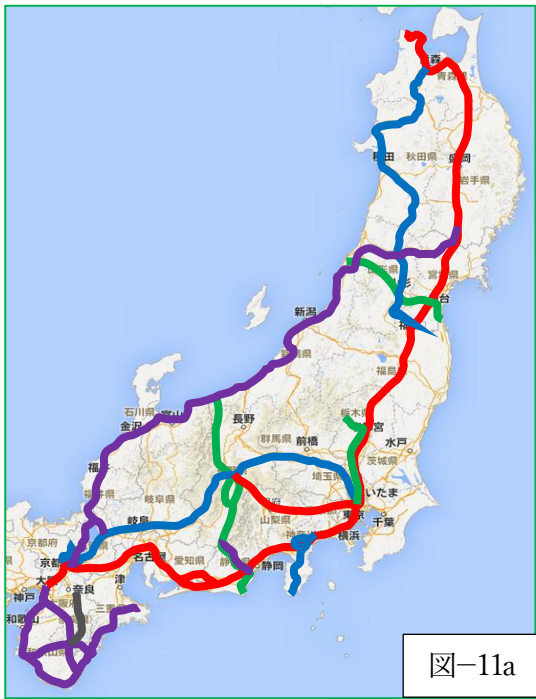


図-11b

| 図       | 実施期間                                             | 年 齢     | 区間数 | 現地における<br>基点から基点までの正味  |        |
|---------|--------------------------------------------------|---------|-----|------------------------|--------|
|         |                                                  |         |     | 実歩行<br>累積距離数           | 連泊累積日数 |
| 11a     | 【前半、街道トレイル】<br>2010(H22)年～2014(H26)年<br>(前半5年間)  | 61歳～65歳 | 14  | 6,952 km<br>(31.4km/日) | 221日間  |
| 11b     | 【後半、へんろトレイル】<br>2015(H27)年～2024(R6)年<br>(後半10年間) | 66歳～75歳 | 10  | 8,594 km<br>(30.0km/日) | 291日間  |
| 15年間の総計 |                                                  |         | 24  | 15,546km<br>(30.6km/日) | 512日間  |

(end)